ドストエフスキーへの旅

佐々木美代子

ドストエフスキーへの旅

佐々木美代子

新潮社版

ドストエフスキーへの旅

一九七八年六月一五日印刷
一九七八年六月二〇日発行
著　者　佐々木美代子
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
郵便番号一六二
電話（業務部）03―二六六―五一一一
（編集部）03―二六六―五四一一
振替東京四―八〇八
印刷　東洋印刷株式会社
製本　新宿加藤製本株式会社
定価　九五〇円

© 1978, Miyoko Sasaki
Printed in Japan

（乱丁・落丁本は，ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。）

ドストエフスキーへの旅 = 目次

1 旅立ちまで 7
2 ロシアの匂い 25
3 生誕の地 31
4 一枚の絵 53
5 工兵学校の「窓辺」 61
6 『貧しき人びと』執筆の家 75
7 夢想家への断章 91
8 センナヤ広場周辺 100
9 サーシャ 121
10 「生活は、幸福です」 134

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

11 終の住処、そして……　148
12 夜　175
13 一粒の麦もし死なずば　185
14 再びセンナヤへ　199
15 バルト海のほとり　210
16 旅のおわりに　218
＊
あとがき　227

装幀　木村　茂
本文写真・地図　著　者

ドストエフスキーへの旅

1　旅立ちまで

裏山へ向かって迫り上がった急な坂道を、私は、一歩一歩踏みしめるように登って行く。後ろは、けっして振り向かない。坂を登りつめたところで、私は立ち止まり、そして、はじめて振り返ってみる……すると、眼下に、東西に細長く拡がった街が、一望のもとに見はらせる。海は、いつも幾らかずつ異なった表情を湛えている。天気の良い日なら、大阪湾の向こうに、紀伊半島がのび拡がって、くっきりと遠望できる——。

神戸で生まれ育った私が、このように坂を登りつめ、高所から自分の街を眺望する習慣を身につけたのは、高校に入った頃からだった。学校から帰宅した夕刻とか休日などに、私は、ほとんど日課のようにして、北に向かって急坂を登って行った。

一日のなかで、この数刻は、私にとって、「特別な時間」だった。ふらりと家を出、坂を登り、高所から街を俯瞰し、そしてあとはただ坂を下って家に戻る……家族には、この行為について何も告げない。こんな反復行為の中で、私は、密かなたくらみを練り上げていった。

高校生であった私は、その頃、自分の前方に、二方向に分岐した道がもう間近に控え待っていることを、強く意識しはじめていた。一つは、この街にとどまり続けること、つまり、両親の翼の中で相変わらず庇護され、安穏と退屈と予測可能な幸福とを、おとなしく享受する道であり、もう一つは、この街を出ること、つまり、単独者となり、自由と不安と何ものかへ挑む可能性を

与えられる道であった。

高所から自分の生まれ育った街を望見しながら、私の内部で、もう一つの道、つまり、この街を出ようという決意が、次第に強く固まっていった。単独者となって、自由に生きてみたい、孤独は逃がれようとすべきものではない、自由への意志は、孤独への意志でもあるだろう……、私は、いかにも高校生らしい気負いと生真面目さで、このように自身に言い含めていった。北へ向かう歩行は、この決意への促しと確認の行為に他ならなかった。そして、家族の中でごく平凡に暮らしていた私には、単独になれるこの一時間ばかりが、密かな精神の核として大切に思われた。

この選択は、まだ明視できない未来を、極めて抽象的に予測し、そこには狭量ゆえの悲壮感が漂っていたのだが、今、あの頃の一途な決意を思い返すと、私は、我ながら少しばかりいじらしく思えてしまう。この決意の結果は、年を重ねるにつれ、さまざまな屈折した苦い認識によって、おのずと純度を濁らせてしまったのだが、それでも、分岐した道の一つを択びとったことへの悔いは、一度として生じなかった。

高校を卒業した年、私は、ひとりで東京に出て来た。大学入学というかたちをとって、坂の上での決意をともかく果たせたのだった。家族を否定したわけでも、確執があったわけでもなく、衷心から単独に暮らしてみたかっただけである。行動における奔放さということではなく、思惟における自在さということで、自由気儘に精神に羽をつけて飛翔してみたかった。

東京は、上京したばかりの私には、とりとめもなく巨大な寄り合い集団として、捉えどころもなかったが、その混然として多様な表情は、私の好奇心を強く煽り立てた。最初、私は、入学した早稲田大学の近くに下宿した。大学まで歩いて七分という、緑の多い戸山ヶ原にある都営住宅の離れの小さな部屋を借りた。そして、受験勉強から解放されてまず手はじめに私が行なったのは、しばらく抑圧されていた読書欲を充たすことだった。私は、大学近辺の古本屋街を歩きまわ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

り、題名ばかり熟知していた本を、手当たり次第に買った。高校の前期に日本文学を中心に読んでいたので、今度は、外国文学を読もうとだけ、漠然と望んでいた。同時に、私は、大学の生協で、日用品や教科書と共に、詳細な東京都の市街地図を買い求めた。

それからの私は、暇な折はほとんど、その市街図をショルダーに入れて、未知の巨大都市の探索に熱中していった。山と海に挟まれた坂の町に育った私には、果てしない平面上に拡がっている東京の街のたたずまいが、つまり、どこまで行っても人間のすまいが連なっているという地上の姿が、物珍しく、驚異でもあった。そんな拡がりの中を、ひとりで歩きまわりながら、他者ばかりと出会うことが、新鮮で愉しかった。また、歩いているとき、思考に弾みや律動感が伴い、思惟は、活発に、しかしとりとめもなく展開していった。街中を徘徊することは、精神が何かを探し求めている行為と言えるだろう。

そんな探し求める行為は、読書の仕方にも端的にあらわれた。学生生活に入って時間の余裕だけたっぷり獲得できた私は、ただアト・ランダムに読書に耽った。古本や友人からまとめて借りた本を、積み上げ、それを切れ目もなく読み継いでいった。けれども、続けざまに読む本の間には、何らの一貫性も相似性もなく、嗜好の傾きすら定まっていなかった。ところがある時、そんな乱読の仕方を、私は不意に中断させられてしまった。

大学の生協で数冊まとめて購入した世界文学全集を、私は、順に読み進んでいた。その中の何冊目かに、ドストエフスキーの『罪と罰』があったのだ。『罪と罰』を読んでいるなかで、私の意識は、ようやく歩みを止め、立ち尽くしていった。私の裡に、作品の世界に深く融け込んでいく親和の思いと、同時に、何か不安な未知のものが、自分を揺り動かそうとしている気配を感じとれた。

『罪と罰』を読み終えた日のことを、私ははっきりと憶えている。

上京して二か月たった、五月も終わりに近い日だった。私は、二、三日前から読んでいた『罪と罰』を、その日は、夜を徹して読み続けた。物語の半ばにさしかかると、もう中断することなど考えられなかった。第六篇を読み終えたときは、午前四時近くになっていた。事件の一応のかたがついたことで、私は幾らか安堵し、自分を宥めすかすように翌日の授業のことを想い起こさせ、冷えきった蒲団にもぐり込んだ。けれども、暗闇の中で、私の意識は極度に張りつめていた。何かがしきりにけしかけてき、到底眠れそうにもない。私は意を決し、再び机上のスタンドを点け、上着をはおって机に向かった。そして、次の日のためにわざと残しておいたエピローグを、引き続いて読んでいった。

物語を読了したとき、窓の外は黎明を迎えつつあった。本を閉じたあと、私は、机に対座したまま、夜明け前の薄寒さのせいばかりでない全神経の強い緊張を、痛みのように感じていた。それから、私は机を離れ、窓の外を眺め遣った。私の下宿した離れの東に面した窓から、学習院女子部の裏庭にあたる雑木林の一角が、すぐ近くに見渡せた。薄闇の中で、樹々が、次第に輪郭を浮き上がらせていた。間もなく木立の中で、小鳥がまばらに啼きはじめ、長らく沈黙の世界に浸っていた私の耳に、最初の昼間の音を伝えてきた。薄闇は、少しずつ薄明かりへと変じてきた。夜が拭い取られるように消え去り、朝が微妙な変化を見せながら地上を覆ってくるさまを、私は、窓辺に立ったまま見据えていた。

その時の私の意識は、エピローグのラスコーリニコフに融け入っていたのだと思う。早朝のシベリア……荒涼とした大河と、その向こうに果てしなく拡がる草原を、深い憂愁と忘我の境地で、茫然と眺め続けているラスコーリニコフの最後の姿が、私の中に深く刻み込まれてしまっていた。

やがて、朝日が、馴染みはじめた東京の街を照らし、新緑の鮮やかな若葉が、光を享けて艶やかに煌めき、小鳥の囀りは、雑木林におびただしく充満してきた。こんな光景をぼんやりと眺め

ながら、その時、私は、まだ充分に自覚できないものの、何か決定的ともいえるかたちの深い感動と衝撃を受けていることを感じていた。窓外の風景は、いつも通りの一日が始まったことを示しているだけであったが、私には、この世界が、なんだか別な様相で、別な意味あいを帯びて始まりつつあるように思われた。

私は、相変わらず東京の街中を歩きまわっていたが、この読書の体験を境に、私の歩行には、一種の強い気分の傾きがみられた。ペテルブルグの街中を日々徘徊するラスコーリニコフの気分に、私自身を半ば同化させていたのだ。自炊生活がまだ巧くやりこなせず、下宿主との台所の共用が耐えられなかった私は、夕方になって、夕食のためだけに、大学へ再び出かけて行った。そして、学生食堂で、安くてひどくまずい定食をとったあと、暗い夜道を引き返した。家からの送金を待ち侘びるという下宿生活の覚束なさを、そのまま学生ラスコーリニコフの貧しさに重ねてみたりするのだった。街中を憑かれたように歩きながら、観念のたくらみを増殖させ、肥大した自意識にのみ拡大鏡を当てがい、反面、生活事への無頓着、冷淡さを徹底させていくという青年期に特徴的な精神の病い（もしそれを病いと言うのなら、だが……）を、ことごとく私自身の上にも重ね合わそうと試みた。そんな同化の仕方は、単に文学の消化不良現象にすぎないのかもしれなかったが、一時期、私はラスコーリニコフをひどく身近に感じ、そして密かに愛してもいたのだった。

けれども、十八歳の私には、『罪と罰』から受けた感動や衝撃を、言葉によって正確に意味づけし、認識することは、まだできなかった。むしろ、重苦しい余韻をどこかでは持て余し、暗い憂鬱な物思いに襲われ、気分が滅入って来ることを否めなかった。ただ、避けて通り過ぎてはならない世界、人間の精神の底にある姿を見てしまったという強い自覚はあった。もし、このように取り憑かれる感受の仕方が、青春の「病い」の一種だとしたら、私の周辺にも、ごく少数なが

ら同病患者がいた。同じ疾病を見抜きあった者同士で、お互いの病気の痕跡を見比べあい、その重さを量りあった。そんな友人の存在が、ドストエフスキーへの傾斜に拍車をかけ、私は、その後、次々とドストエフスキーの小説を読み進んでいった。

三年になったとき、私は両親には告げずに、大学を休学した。そして、独りでロシア語を勉強し、翌年、ロシア文学科の三年に編入し直した。高校時代、坂の上で進路を決めたように、この時もまた、ひとつの進路を択びとるため、若干の軌道修正をしたのだった。しかし、私は、どうやらあまり勤勉な学生にはなれなかったようだ。授業に関しては、かなりいい加減に対応し、適当にさぼり続けた。ただ、その時期になって、ようやく自身の文学への志向が自覚できるようになった。ドストエフスキーに出会ったのがきっかけで、ロシア文学を専攻することになったのだから、ともかく一通りは本格的、系統的に関わってみなければと、私は几帳面に自身に義務づけ、ベルジャーエフ、メレジコフスキー、ジッド、小林秀雄等のドストエフスキー論を読み継いでいった。その作業で、それまでの漠として稚い把握に、ある程度の理論的輪郭づけを施すことができたのだったが、それと同時に、私は、ドストエフスキーへの関わりに、何か行き詰り状態を感じはじめた。早計であったにしろ、一通り読んでしまったとき、私は、「語り尽くされた作家」に、それ以上の食指を動かされなくなったのだ。

私は、視線をまた転じはじめた。

ジョイスの『ユリシーズ』が、明らかな契機となった。二度目の三年生の秋、私は、伊藤整訳の『ユリシーズ』を読みながら、日常的次元のままで捉えた人間の意識の複雑な精妙さ、猥雑さのリアリティが、たいそう痛快に感じとれた。ジョイスは、私自身の意識がその中にすっぽりと具合よく、何ら無理することない気楽さで嵌まり込めるかたちで、私の前に、二十世紀文学という新しくて際立った概念を呈示してくれた。そうなると、あれほど熱中したドストエフスキーも、

いかにも前世紀風な古色蒼然とした様相で映じてくるのだった。これを機に、私は、今世紀の西欧文学の太い幹になる作家たち、ジッド、サルトル、カミュ、カフカ等を、大雑把に渉猟し、現代という時点を、それら西欧精神の流れを通して認識したいと願った。文学の方法の問題を意識的に考えるきっかけも、これらヨーロッパの現代作家から与えられた。こうして二十代半ば頃の私は、むしろ新しい西欧文学に強く傾斜していた。

そのうち、私は、これら二十世紀の作家の精神に、まぎれもなくドストエフスキーの影が、大なり小なり投影していることに思い当たり、そのことに新たな興味を喚び起こされてきた。ドストエフスキーから受けた強い影響を、正直に告白している作品を探し出すのは、それほど困難ではなかった。

そこで、私は、そんな中で最も親和を感じた一人の作家に、そのつもりで照準を当て、集中的に読んでみることにした。それは、トーマス・マンだ。マンの作品をその初期から続けて読んでいた私は、四年の夏休みに、『魔の山』に入って行った。文学との出会いで、「時を得る」ということは、確かにあると思う。物語の導入部から、私はたちまち、主人公ハンス・カストルプに緊密な友情を感じた。ラスコーリニコフに抱いた熱っぽい近親感よりは遙かに冷静な隔たりを置いて、私は、ハンスと共にサナトリウムの病者たち、つまりさまざまな精神のかたちに出会っていった。東方と西方の中間に、自身の精神を位置づけたドイツ青年の認識は、私にとって大変示唆的だった。私は、このハンスの自己認識に刺戟され、ロシア（ハンスにおける東方）を、とりわけドストエフスキーの世界を、外側から、憧憬と畏怖と未知の対象として捉え直す視点を、私自身に応用してみた。魅惑的で不可抗力な牽引と神秘を潜め、原初的な自由奔放さに充ちたロシア女性に惹き寄せられていく、ハンスの精神の傾斜が象徴しているのは、作家マンにおけるドストエフスキーへの傾斜に他ならないと、私には思われた。私は、そんなハンスに近い感受で、ドス

トエフスキーの世界を、あらためて、未知数の魅力に充ちた存在として感じ直していた。

学部を卒業した時点では、私はまだ、自分の見出したこの新しいテーマ、いわば私自身についてのテーマを、どのような形で究め、表現すればよいのかがわからなかった。私の歩みは、いつも歩調が鈍く、どこか不徹底のもやがかかり、自信なげであった。またも一年間の休止の後、最良(ベスト)のかたちではなく、より良(ベター)いという選択のもとに、私は、大学院に進学した。そして、ドストエフスキーとトーマス・マンを併せ読む中で見出した幾つかのテーマを、一応比較文学の方法を適用してまとめてみることにした。書き上げた時点で、ドストエフスキーを外側から見直したいという私の所期の目的は、ある意味で果たされたことになる。私は、端的に言えば、ただ自己確認のつもりで決算書を作成したにすぎなかったのだから。そして、このことは、確実に新たな行き詰りを内包していた。自分が、文学を学問研究の対象としてアカデミックに関わっていくタイプの人間ではないということを、私は、書き上がった論文自体から痛く悟らされたのだった。

半ば満足し、半ば挫折感を抱いて大学を離れたとき、私は、肩の荷を下ろせた解放感を味わうと同時に、また新しい不安の中にいた。自分が何に向いていないかが判明したことは、何をすればよいのかという自覚に、直ちに通じてはくれない。方向も定まらぬままに卒業したあと、就職もせず、そしてもはやできない気分であった。何度も足踏みしながら、何とか学生生活を終えたとき、私は二十七歳になっていた。それでも、不安な状況をある期間保ち続けることのほうが、よりよい選択かもしれないと、どこかですっかり居直り、学生時代の延長にすぎない不安定なアルバイト生活を続けた。けれども、焦点を見失った気分は、次第に内部で鬱屈してきた。

未明の薄闇の中に、ぽつんと佇んでいるだけのそんな自分の意識に、何らかのけじめがつけられれば……と、かすかな願望を託して、私はその年、一九六八年の夏、初めてロシアをひとりで旅してみた。一か月間のその旅は、すぐさま私に新しい確かな展望を見出させてくれたわけでは

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook